春期福音特別集会（裾野）

一切を棄てて
――マルコ伝第10章13～22節――

１９８８年３月20日
小池辰雄

按手　幼児の国　神の懐の中に　沈黙の祈り　一極絶対　みんな身にあり　一切を棄てろ　一如　木喰上人　太陽のおかげ　どん底に立つ　汝自身を惜しむなかれ　毎日が復活節

【マルコ10・13～22】

13イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子たち禁めたれば、14イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来るを許せ、止むな、神の国は斯のごとき者の国なり。15誠に汝らに告ぐ、凡そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず』16斯て幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

17イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪ずきて問う『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』18イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。19誠命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」』20彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』21イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』22この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

●按手

13イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子たち禁めたれば、14イエス之を見、いきどおりて言いたもう

お母さんがイエスに、幼児に触ってもらいたいと。「手が触れる」ということ、これは「按手」です。手で安らかにする。キリストはしばしば按手をされた。ナインの若者の柩に按手して、「起きよ」と言われたら、死人が棺桶の中から起きてきた。大変な方です。ですから、お母さんが幼児に、キリストに手を触れていただきたいという。これはキリストの言葉自身がもう按手と同じです。

「我が言は霊なり、生命なり」

というでしょ。黙って按手をされると、ある意味においては言葉以上の力がある。その事態をお母さんは信じて、お願いしているわけです。ところが、弟子たちは

「何をするか」

と禁じたので、キリストが憤られた。

「お前たちは、とんでもない」

と。大体、特に男はキリストに一遍本当に叱られないと、信仰の世界に入れないらしい。叱られるどころではない。ぶっ倒される。パウロはまさにそうです。

「あれはいくら言ってもしょうがないから、ひっくり返してやれ」

と。これが復活のキリストの、パウロをひっくり返す、まさに「回帰」のわざです。回(めぐ)り帰る。ただ心ばかりではない。全身で帰る。私は「回心」という言葉ではもの足りない。

「パウロの回心」

なんてよく言うけれども。全存在でぶっ倒れて帰っていく。もう私たちはこのプロテスタントの信仰で、特に無教会でもって、観念信仰でさんざん回り道させられてしまった。

「信仰のみ」

なんて言ったって、ダメなんです。もう本当に第二の宗教改革を我々一人びとりがやっていかなくては、世界は滅びる。数ではないんです。一人の力が全世界をひっくり返すようなこと。パウロはそれだけの信仰をもたされました。どうぞ、皆さん、男でも女でも、歳をとっていようが若かろうが、そんなことは問題ではない。キリストが本当にお入りになったら、もうえらいことになる。

●幼児の国

14 **イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児(おさなご)らの我に来るを許せ、止(とど)むな、神の国は斯(かく)のごとき者の国なり。**

「何を言うか、お前たちは。幼児らを私のところにつれてこい。神の国は斯(かく)のごとき者の国である」

と。幼児が天界では一番キリストの近いところにいる。

私は家の孫どもを保育園に自転車にのせて送り迎えした。私が迎えにいくと、孫は楽しそうに一生懸命で友達と遊んでいる。ところが、私が名前を呼ぶと、どんなおもしろいことをしていても、その声を聞くと直ちにやめて、とんで来る。その姿が幼児の姿です。

「ちょっと、待って」

なんて言ったことがない。すぐやめてとんで来る。私は本当に参ったですね。これが幼児の心です。

「幼児の如くならなければ天国に入れない」

という。声のうちに直ちにとんで来るというのが、これが本当の信行なんです。もう「仰ぐ」なんて書いたらダメです。私は「しんこう」は「信仰」と書きたくない。神学者たちは

「信仰と行為」

なんてさんざんやっているよ。「信仰と行為」ではない。正に信行一如が、これが聖書の現実なんです。「聖書研究」なんていくらやったってダメです。ヘブライ語をやろうが、ギリシヤ語をやろうが。

「その方がよりよく聖書が分かる」

なんて、冗談いうなと。日本語で結構だ。その奥の神さまの言葉というものはヘブライ語でもギリシヤ語でもないんです。その響きがこなければね。「聖書入門」だとか、「聖書の読み方」なんて、そんな本がいくらあったってダメなんです。聖書についていくら語ったってダメです。中からものを言うようにならなかったら、本ものではない。

●神の懐の中に

15誠に汝らに告ぐ、凡(およ)そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能(あた)わず』16斯て幼児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

「幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、入ることができない」

と。「信ずる」とは言ってない。

「身体で受けろ、体受せよ」

と。身体で受けとる、全存在で受けとる者でなければ、入ることができない。「信ずる」ではないんだ。「入る」んだ。神の国の中に信入する。これはまさに信入なんだ。信じ入る。祈り入る。これは全部、入らなければダメなんです。外側ではダメ。外接円もダメ。内接にならなければ。

「神・キリスト・我」

という内接円に。これだけが本当の現実です。

あなた方、本当に祈っているかね。キリストは神の懐の中にいて祈る。神の懐の中の独子です。我々はキリストの懐の中に入らなければ。私は人のために祈るときに、キリストの懐の中に入るまでは祈らんです。入って、その中から祈り込むんです。

もう一つ言おうか。キリストの中に入って、例えばAさんのことを祈るときには、私はパッと魂が飛んでいく。そして、Aさんと一つになって、その境地で祈る。その「ために」祈るのではない。Aさんとなって祈る…（異言）…。そういうような祈りを瞬間的にやるです、私は。

キリストが

「くだくだ祈るな」

と言われた。説明しているような祈りはダメなんだよな。無教会にいたときに、みんな立

派な祈りをするんだ、祈りで講義しているような、ご無理ごもっともな祈りを。何も悪口を言うわけではないけれどもさ。その響きはどこまで届くか。神さまのところまでいくかどうか。それは偽りではないでしょう。けれども、残念ながら、ただ心の祈りくらいではダメなんだ、霊の祈りにならないと。

十二召団のために私は10分で祈れますよ。10分かからないかもしれない。各召団の――全部の人ではないですよ――今日はこの人、この人というように。電光石火というけれども、火花の散るように。相手は知っているかどうかは知らんけれども。もうとにかく、ズレのあるところの偽りのことは嫌なんだ、私は。それでは力が来ないんだ。現象面は神さまがなさる。けれども、本当の現実は即、入れる。本当の生命は、祈りの中の、祈りの現実で必ず来ます。キリストは本当にそれを瞬間的に時間空間を超えてなさっている。イエスは、

「聴きたまいしを感謝す」

なんて仰っているんです、祈らない前から。未来完了を現在で受けとってしまう。大変な方です。

●沈黙の祈り

「いい加減な気持で集会に来るなら、来ないでくれ」

と私は言っている。もったいないから。或る大きなグループは

「ワッショイ、ワッショイ」

と祈っている。けれども、人間の熱心ではない。神の熱心が、キリストの熱心が入ってこないとダメです。圧倒されて祈るのでなければ。

沈黙の祈りが一番凄い。私は床（とこ）の上で坐って祈っているときに、ウワーッと霊震が起きる。まぁ、80歳を越えてやっとこんなことを言っているんですが、皆さんは若いから、どしどし凄いことになってください。そのうちにもう、あなた方は光ってしまって見えなくなる。集会に来たけれども誰もいなかったなんて（笑）。

聖書を読んでお終い。読むことが直ちに祈りの世界に入らなくては。本当ですよ、これは。聖書を読んでまた祈ろうではない。聖書を読むことが直ちに祈りの世界に入る。大変なものだから、この聖書の現実というものはね。

こういう、13節から15節のたった三節の中に凄い現実がある。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書の、どこでもいいから、これを破ってポケットに入れて、電車の中でもどこでも読む。そして、その境地に入る。周（まわ）りがどんなに騒がしくたって、そんなものは耳に入りはしない。聖書の中に入っていれば。人生の最大の教科書は聖書です。とにかく、もう素晴らしくてしょうがない。

●一極絶対

17**イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪ずきて問う**

イエスがエルサレムの方へいらっしゃった時に、青年がやってきた。

「**一人はしり来り跪ずきて**」

と。それは結構です。この頃の青年なんか、「跪き」もしない。立って、大体、無礼なんだ。全く、日本の民主主義なんていうものは困ったものだ、身勝手主義で。

さすがはしかし、ユダヤの青年だよ。「世界は何ですか」なんて聞かない。

『**善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか**』

「善き先生、永遠の生命をつぐためにはどうしたらいいですか」

と。「何をなすべきか」という実存の問題です。行為の問題。ギリシャ系の人は、「何であるか」という、知の問題です。ところが、ヘブライは、行為、永遠の生命、生命の問題です。そこがやはりヘブライ人は素晴らしい。それを問題にしている。生きるか死ぬかの問題です。ところが、「今、お前はいいことを聞いたね」とはキリストは仰らない。

「なぜ、私のこと善いと言うか」

と。「善き先生」の「善き」が気にくわないんだ、キリストは。

18**イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。**

「神ひとりの他に善き者なし」

と。いいですか。これは凄い言葉です。こういうのに驚嘆しないとね。青年が「善き」と言ったときには、善悪の善なんです。キリストが「神のほかに善きものはなし」というときの、この「善」は相対的な善ではない。これは絶対なんです。善いものはたくさんあるよ。しかし、そんな相対的に善いだの悪いだのと、そんなことは問題ではない。神だけが比較を絶したところの善なるものである。義なるものである。愛なるものである。神の義でも愛でも善でも何でも、それは比較を絶したものです。一極絶対なるものです。相対的ではない。両極ではない。

●みんな身にあり

禅宗の世界はその消息が分かっている。禅の世界は、この相対が嫌いなんだ。臨済禅というね。榮西の中国の師です。五台山という山で、如来に会いたいというわけで、ここでみな拝むわけだ。ところが、臨済という坊さんは、

「五台山に如来はいない」

と言う。ちょうど、こちらでいうと、

「エルサレムにキリストはいない」

というのと同じことだ。どこかの場所に行って拝もうというやり方はまだダメだと。それでは、どこにいるか。

「如来をうちに宿すまではダメだ」
と。それを「殺す」という言い方をしている。
「如来も殺さなければいかん」
と。ずいぶん乱暴な言い方をしている。ということは、外界にいくら求めてもダメだということです。
「極楽は東にあらず西になし、きたみちさがせみんな身にあり」
という。
「**天国は汝らのうちに在り**」
とキリストが言われたのと同じことです。
「どこだと言って捜すのではない、お前たちのうちにあるよ」
と。
「**私は何ものでもない**」
と言われたキリストが、
「**我を見しものは父を見しなり**」
と言われたでしょ。彼はゼロになったら、何ものでもなくなったら、このゼロは円現したところの神さまであったということになる。こういう事態が本当の信なんです。もうこれが本当の一如なんです。
だから、私が言っている「無」なんていうものは、普通の神学者には分からないから、私の『無の神学』は誰も書評が書けない。
キリストは、相対的な善悪なんていうものは全部考えてない。
「私は何ものでもない」
という。これが
「霊が貧しい」
ということです。「天国」というのは、神さまのいらっしゃるところ、神さまの統べ治めたもうところでしょ。神さまの生命がそこに充満しているところでしょ。それが
「**汝らのうちにあり**」
という。
「**汝らのものなり**」
と。本当に平伏して、「もう我もなく、人もなく、世もなし」というところに入ってみろ。そうしたら、神さまが入ってくる。

●一切を棄てろ

「**求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。門を叩けよ、さらば開かれん**」

という。これは、

「キリストを求めよ。必ず与えられるぞ」

ということ。

「門を叩け」

は、キリストという門を叩く。ぶっ倒れる。ぶっ倒れなければ、開かないですよ、ノックくらいでは。体当たりで叩かなくては。ぶっ倒れると、開かれる。

「尋ねよ」

と。何を尋ねるんですか。何を尋ねるか書いてない。

「私を尋ねるんだよ。必ず見いだすよ。ここに居るではないか」

と。けれども、もう一つ私は言いたい。

「何かを持っていて求めたってダメだ。一切を棄てろ」

と。他のものを持ちながら、求めてもダメです。

全部棄てて、何もないという、そのときにキリストに向かってごらん。力が、生命が、光がグーッとくるから。「求めよ」というのはそういう求めなんです。「求め」は、「ぶっ倒れる」と言ってもいい。とにかく、他のものを顧慮しているうちはダメだ。

「29イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或(あるい)は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、30誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし。即ち、家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。」

（マルコ10・29～30）

「我がためにすつる者は」という。

「こんな激しいことを言うキリスト教というものは日本の道徳にあわない」

なんて、昔は思われた。けれども、捨てたと思ったものが今度は逆に、全部救いあげてしまうんですよ。全部、拾い上げてしまう。全部、すくい上げる。

●一如

「横の相対界に絶しろ。本当の生命の世界は、キリストとの一対一の絶対界である」

ということです。一対一の絶対のときには、一如にならなければ、絶対にならない。「キリストと我」とまだ言っているうちは。

「我、キリストの中に」

と言ったね――「エン・クリスト」ということ――ところが、乱暴な言葉でいうと、

「我はキリスト。キリストは我」

という、その世界なんです。それが、キリストが、

「我と父とは一つなり」

と仰った世界なんです。

「キリストと私は――キリストとあなた方一人びとりは――一つなり」

という。本当にそこに来てください。そうしたらもう、

「何がどうなろうが、どうにでもなりやがれ」

ということになる。私は江戸っ子だから、そんな言葉を使いますが（笑）。勝手にしやがれと。そういうわけです。もうたまらんです。宇宙的になってしまう。

私はきちがいかな。それは普通とは気が違っているよ。ちょっと気が違うよ。普通の気とはちがう。それが本当の気、本気なんだ。この気違いは本気なんだ。本気でものを言っているんだ、私は。

気という字は素晴らしい。霊であり、風である。

「天地正大の気」

という。藤田東湖のあの詩の前半は素晴らしい。あれは本当に福音的な言葉です。

皆さん、私は告白しながらもうグーッときているんだが、あなた方はどうなんだ。のほほんとしているようだが。のほほんとしていたらダメだ、入ってもらわなければ。そうではないでしょ。グーッと来ているでしょ。集会に何のために来たのか。話を聞きに来たのではない。

「一緒にキリストの中に入ろう」

というために来た。

「今日のお話はよかった」

なんて、そんなことではないんだ。

●木喰上人

私は『芸術のたましい』に木喰上人のことを書いた。

「日本にもこの使徒たちと同類の偉大な仏僧たちがいた。その一人に木喰（もくじき）上人という芸術僧がいたから、ちょっと触れておこう。柳宗悦が彼のために一巻の書をものしている。それにこう書いてある。

「彼（木喰）の一生は家なく妻なく子なく財なく、更に欲もなく我もなき一生であった。この世に一物もない彼は、仏に於て一切を持つ彼であった。」何とすばらしい実存か。彼は三十年間廻国順礼を成し遂げた。彼は仏像の木彫をいとなみつつ行脚した。その仏像の顔が何と活きていることか。慈悲心が旺溢している円現の相である。

晴れても降ってもかざす菅笠には次の句が記されてあった。

本来無東西、何処有南北（本来東西無し、何処にか南北有らん）

素晴らしい言葉だね。今の世界は東西の勢力でもっていがみ合っているけれども、本来は、東西も南北もありはしないぞ、何を言っているかと。

迷故三界城、悟故十方空（迷うが故に三界は城にして、悟るが故に十方は空なり）

という。仏教の世界には素晴らしい言葉があるね。私はこの「悟るが故に十方は空なり」というのは大好きなんだ。本当のものが充満している世界です。

念珠を首に懸け、左手には鈴を持ち、右手には一本の金剛杖を握り、肩には鑿（のみ）と小刀と鉈（なた）と鋸（のこぎり）の入った彫刻道具袋を負って遍歴していたのであった。

「木喰のけさや衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

キリストの本願は絶対に破れないですよ。外国の本を読むよりか、こういう本を読んだ方がよっぽど聖書が分かるよな。

「仏法はよきもあしきもへだてなしわが本願にもらすものなし」

素晴らしい言葉だね。「仏法はよきもあしきもへだてなし」という。キリストが

「善き者にも悪しき者にも雨を降らせ、日を照らす」

と仰ったでしょ。あれがこの世界なんだ。

「わが本願にもらすものなし」

と言う。キリストの贖いからもれるものは一つもない。

十字架の片一方の盗賊は、

「お前は神の子なら、俺たちを救ったらいいだろう」

と傲慢なことを言った。他の片一方は、

「私はさんざん悪いことをしましたから、せめても覚えてください」

と言ったら、キリストは、

「お前は今日、私と一緒に天国だ」

と言われた。あっちは地獄、こちっちは天国。人類を二つに分ける十字架です。サタンの味方になるか、キリストの僕になるか。どこどこ人ではない。何々教でもない。プロテスタントでも、カトリックでも、何でもない。「キリスト」の「キ」の字も知らなくてもいい。砕けたる魂です。

●太陽のおかげ

幼児にとっては、お母さんは絶対的存在です。この地球は無的存在です。太陽が無かったら、地球はない。だから、自然界で地球は無者なんだ。地球は自分の力を何ももってない。我々は、この地球上の生きとし生けるものは全部、太陽のおかげである。

私は今度の『エン・クリスト』誌34号の「独和対照」の詩にそれを書いた。ドイツ語を読むのはよしておきますが、日本語の方を読みましょう。実は、こないだドイツ人の会があったから、行ってこのドイツ語の詩を読んでやったら、

「あなたは天才だな」

とドイツ人が言ったよ。ドイツ人がびっくりしていた。

「それは私には大きな歓びだ、
聖書を繙くことは。
聖書の中心存在キリストは
神さまの太陽として赫々と照っている。
彼は天降りした師匠、
見よ、何たる権威ある彼の言ぞ、
み前に砕け伏すのみ、
かくて霊と生命とを賜る。
春の雲かたなびいている、
小庭の花が咲き匂う。
ああ、間もなく復活祭を歓び迎える。
我らが霊的に復活すれば、
太陽は暖かく楽しく地を照らし、
万象を実に呼び起こして甦らせる。」

そういう詩です。それで、

「キリストに無条件に頭を下げます。太陽の前にも無条件に頭を下げます」

と言った人がある。誰だか知っているかい。世界的大詩人ゲーテです。ドイツ文学の人たちはこのゲーテのそういったような魂を分かっていない。彼は死ぬ二週間前にこのことを言った。

「人々が、私の性質の中に、キリストに拝跪する畏敬の念を示すものがあるかと私にたずねるならば、私は、全く然り！と言う。もし私に、自分の性質の中に太陽への畏敬の念があるかとたずねられたら、私は再び、全く然り！と言う。」

と。ゲーテというひとは太陽が非常に好きだ。ゲーテのお母さんも太陽のような性格の方です。誰をも愛し、誰からも愛された。非常に明るいひとだった。それがゲーテに移っているね。もしドイツの国旗が太陽だったら、ゲーテは本当に喜ぶはずだ。

ところが、日本人はどうですか。太陽をさっぱり、日本の国旗をいい加減にしているではないですか。藤井先生ではないけれども、もう、

「滅びよ！」

と言いたくなる。日本は正直、一番あぶないよ。ソ連がこわいからではない。精神的に日本は頽落しつつあるから、いつひっくり返るか分からん。歴史をみると、相手がやっつけるのは、そのやっつけられる国に或る原因があるからなんです。ローマにしても、ギリシヤにしても、みんなそうです。ドイツにしても、日本にしても。みんな驕ってしまっている。驕りたかぶり。文明が非常に頽落している。そういった栄え方をしているのは、必ず神さまの罰がくる。アッシリヤやバビロニアもみんなそうです。20世紀の終りにはどうなるか

知らん。「経済大国」なんて言ったって。がめついことばっかり考えているから、大体、世界から嫌われているではないですか。なぜかというと、ひとに本当に善きことをしようとしないで、何でも儲けよう儲けようとしている。逆になる。情けない国だね。

今までの日本の精神的な伝統の素晴らしい方々がある。彼らは天界でもって嘆いたり、怒ったりしているよ。明治維新の第一流の人たちはみんな、あのときに仆れたではないですか。吉田松陰にしろ、佐久間象山にしろ、坂本龍馬にしろ。第一級の人は仆れて、天下を取ったのは二級だよ。キリストが好きなお言葉は、「隅の首石（すみおやいし）」という言葉だ。棄てられて、隅の首石となる。それが神の国をつくっていく。

●どん底に立つ

日本語では、

「落ち着きなさい」

という言葉がある。「落ち着く」というのは、最後まで落ちていってそこで着くことを「落ち着く」という。どん底に立つことを、本当の「落ち着く」という。そういう、落ち着きの仕方をしないとね。どん底に立つ。聖霊は、このどん底に立つ人に一番力強くはたらく。もう、聖霊と代えるものはないですよ。それを私たちにキリストは与えようとされている。

「十字架でもってお前は、もう過去も現在も未来も本当に無き者にしてやった。我執の無き者にしてやった。相対的人間小池がどうであろうと、そんなことは問題ではないぞ。我を見よ。我に来たれ」

と。この無をいただいたら――小池という「1」が「0」になったならば――無限大にされつつある。皆さんがそのとおりです。これを福音という。

「生命を棄てて贖って、それから今度は、この復活の霊生をお前たちに与える。祈っていろ。聖霊がくるぞ」

と。この聖霊が本当に復活の生命の実体なんですから。他のいかなる霊とも代えることができない。キリストに顕れた霊ですよ。絶対に他の霊ではない。「生ける御霊」と、パウロがさんざん言っている。パウロがローマ書7章で、

「ああ我悩めるひとなるかな。この死の体より我を救わん者は誰ぞ」

と呻いていたが、

「この生ける御霊（みたま）によって私は罪と死の法より解放された」

と言って、彼は第8章では絶叫している。あの素晴らしい第8章は文字ではないですよ。詩であり歌である。

私はなぜ、ゲーテだのダンテだのが好きかというと、彼らがそれだけの魂であったからなんです。預言者たちや使徒たち、それから偉大な仏教の坊さんたちは誰でも私の友達ですよ。それは、私が偉くなったからではない。私は何者でもないものにされて、キリスト

の霊が入ってきたからです。だからもう楽しくてしょうがない。

そういうようにして、本当に歴史を現在にして生きることができるんです。未来もまた現在に化して生きることができる。必ず神の国は来ますから。神をなみしていれば――私の讃美歌にあるけれども――えらいことになる。

お釈迦さんもえらいけれども、キリストは正直、けたちがいなんです。これははっきりそうです。お釈迦さんは、とにかく、だんだん修行して悟ったんだけれども、キリストは初めから神に在って生きておられた。

「によって」ではない。「何々によって」と時々言うけれども、「によって」ではダメです。「に在って」ということ。そこに在って、そこに存在してものを言わないとね。「よって」というと、何か手段方法みたいだ。ちょっとした言葉でも、本当にその中からものを言っているか、すぐ分かる。

「身を捨つる身はなきものと思ふ身は天一自在うたがひもなし」

これは凄いね。これは木喰の歌ですよ。「身をすつる身はなきもの」という。捨てようとする身も私にはありませんよという。無身だという。捨てる身もない。これは大変な境地だね。「天一自在」とは素晴らしい言葉だね。一般のキリスト教信者にはこんなことは分からんです。ところが、キリストの霊がくると、こういう言葉が全部分かるんです。

「聖霊というと、何か聖き霊だから、なかなかこれは大変だな、その聖き霊は」

なんて、そんなことを言っているうちはダメだよ。その聖き霊は我々を聖化するためにやってくるんだ、一番汚いところへ。こっちが汚くても、ひとつも差し支えない。遠慮はいらない。十字架でもって贖っているから、何でもやってきてくださる。ただ平伏してその中に入るだけです。

相対的判断を越えてくださいよ、本当に。そして、このもの凄い絶対的な現実の中に、この相対に在って生きるんです。何も山に隠れるのではない。どこに居ても結構です。泥の中から蓮の花が真っ白に咲くではないですか。

無教会の或る伝道者が私と池袋の街を一緒に歩いていたら、ストリートガールが袖を引き止めるわけだ。その伝道者は「汚らわしい！」と言った。キリストは遊女とも交わって、遊女を本当に救ってやったのに、「汚らわしい」とはなにごとか。それはパリサイなんです。

「遊女と取税人はお前たちよりも先に天国にいくぞ」

とキリストは言われた。相対的な「聖（きよ）いの、聖くないの」と、何をぬかすかと言いたくなる。えらそうな人がたくさんいるよ。みかけばっかりです。みんな何か皮をかぶっている。偽善者が多い。

キリストの愛と御霊の力で証（あかし）していく。この福音の世界は行き詰まりをしらん。無条件にキリストの生命の中に誰でもが入れられる。

円空の作っている木像はかなりゴツゴツしているけれども、その表情はやはり微笑みが

多い。ところが、木喰のは本当に丸い。

「みなひとの心もまるくまんまるくどこもかしこもまるくまんまる」

という。福音の世界は結局は、日本の国旗、太陽と同じように円現する。まだ角のあるうちはダメなんです。本当に相対に絶すると――円には相対の点がないでしょ。三角形の頂点ＡＢＣは相対関係だが、円というのは相対がないんだ。無限の角度なんです。無限の角度が円なんです。四角の天体がありますか。全部あれは丸いではないですか。多少、楕円かもしれないけれども。グルグル回っている。

●汝自身を惜しむなかれ

青年がやってきて、イエスが

「いろんなことをお前はやっているか」

――モーセの十誡だよ――と言ったら、

「みんなやってます」と。

「けれども、お前は一つを欠いているぞ」と。

21 **イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う『なんじなお一つを欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』**

この一言に参ってしまった。この一言に及第できるのは、まずあまりいないんだ。私も落第するでしょう。

「**有てる物をことごとく売りて**」

という。本当は「有てる物を」ではない。

「お前自身を、汝自身を」

ということ。我々は要するに、有てる物において自分を惜しんでいるのだから。

「汝自身を惜しむなかれ」

ということになる。我々はみんな自分を惜しんでいる。これがエゴイストだ。万人はエゴイストである、罪びとであるというのは、

「**義人なし一人だになし**」

と、パウロが言っているのはそれだ。キリストだけがそうではなかった。ところが、みんなエゴイストで、我中心なんだ。

ということは、いろいろなものにおいて、才能において、ランニングが速いことにおいて、財産において、名誉において、地位において、女の人なら美しい顔において、「において」自分を惜しんでいる。結局、自分自身を惜しむ。

「それを捨てろ」

と言う。どこに捨てるんですか。キリストの中にです。我々は自分自身をキリストの中に

捨てる。これはできるんです。

「我に来よ」

というのは、キリストの中に――

「我は門なり」

というこの十字架の門を通って――キリストの中に私たちは自分を棄てる。そうすると、これは本当に新しく生かされる。

「人、新たに生まれずば天国に入ることあたわず」

というのはこれなんだ。とにかく、そういう気合で生きてくださいよ、そういう気合で。

●毎日が復活節

「一期一会（いちごいちえ）」

という言葉を、あなた方も知っているでしょ。人間の一生のことを「一期」という。

「一生にただ一回会う」

という。この集会は一期一会的な集会なんです。

「また先生の話は聞けるから」

なんて。知らんよ、そんなことは。

「私は本ものを受けとらなければ、ここからは退きません。帰りません」

と。そういう気持で、あなた方は聞いていなかったならばダメです。いろんなことを振り切ってやって来たんでしょ。

禅宗の言葉に「放下（ほうげ）」という言葉がある。ドイツ語でも「アップゲシーデン ハイト」という。

「放下しろ」

という、この放下は、禅宗ではひとつの修行になるけれども、福音の世界では修行は要らない。キリストの中に放下してしまえばいいんだ。これはありがたいですよ。この福音の世界ほど、ありがたいところはない。ただし、それが観念ではだめだよ、いつまでたっても。

キリストは生命を棄てて、それから今度は、復活して、

「この生命をお前たち一人びとりに全的にやるぞ」

と。何を遠慮しているんですか。もう、相対的な生死を超えてしまうんです。生も死も。これも、さっから言っている相対の世界を超えてしまう。

「まだ、私はあと何年生きるでしょうか」

なんて。私は歳を数えるのはやめたよ、84歳でも何でもいいよ。

生死を超えてしまう。本当の生の世界に入る。もう、我々は相対的な死を乗り越えてしまう。

「キリストを信ずれば復活します。ま、それを信じておきましょう」

なんて、そんなんじゃないよ。「おきましょう」ではないんだ。毎日が復活節なんだ。

日曜日に話をすれば、大体、牧師さんや何かは疲れるらしい。私は疲れない。話してい

るうちに、上から力が来てしまって、ありがたくてしょうがない。あなた方も聞いていて、上から力が来るでしょ。「上」と言ったって、いわゆる空間ではないよ、霊的空間だから。

「なにか、疲れていたけれども、すっかり元気になってしまいました」

なんてなことになる。

「すこし風邪をひいていたけれども、どこかへいってしまいました」

と。本当ですよ。

金銭に囚われている奴が多いものだから――特に日本は――神の国に入れない。

「ラクダが針の穴を通る方がやさしい」

という。「針の穴」というのは、「針の穴」という名前の狭い門があったんだ。そこをラクダが通るのはなかなかむずかしい。この言葉は普通、

「キリストは随分、針小棒大なことを仰るな」

と思うけれども、そうじゃないんだ。ところが、註解書に書いてない。私はイスラエルへ行って、エルサレムの古本屋のユダヤ人のおやじに聞いた。

「いや、そういう名前の狭い門があったんですよ」

と答えた。それで、キリストの御言は直ちに氷解してしまった。

それで、さっき申し上げたように、

「一切のものを私より愛する者は、棄てざる者は」

ということです。

「43然れど汝らの中にては然らず、反って大ならんと思う者は、汝らの役者となり、44頭たらんと思う者は、凡ての者の僕となるべし。45人の子の来れるも、事えらるる為にあらず、反って事うることをなし、又おおくの人の贖償として己が生命を与えん為なり』」（マルコ10・43～45）

という一番力強い御言が一番終りに出てくる。

「私はみんなに贖いとして生命を与える。贖罪の死を遂げる。そして、復活の生命を与える」

と。この言葉がそれなんです。そのためにやって来た。「一切を棄てて」ということは実は、

「己を棄てて」

ということだ。己を棄てるとは、

「キリストの中に棄てる」

ことであった。十字架の中に棄てることであった。そうしたらば、本当にそこで、この相対界から絶して、絶対の世界に入れられてきた。もう、相対的判断の世界ではない。どんなに相対の世界にいながら、そこをすぐ絶対界にすることができるところに入ってきた。これが本当の、門をくぐった事態です。